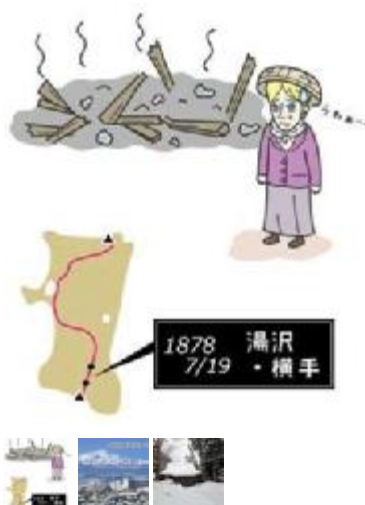


JRに遅れや遅れ

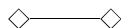
イザベラ・バード秋田の旅（2）湯沢・横手編

2018年2月18日 掲載



タイミングが悪かった、としか言いようがない。1878（明治11）年7月19日、イザベラ・バードが訪れた湯沢（現湯沢市）の中心部は黒い灰に覆われていた。湯沢市史や遐邇（かじ）新聞（現秋田魁新報）によると、前日夜に火災が発生。その後の混乱で馬の確保にも苦労したせいか、バードの湯沢に対する印象は悪く、「日本奥地紀行」で「いやな感じ」と書いている。

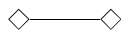
火事後に遭遇した湯沢に対し、解せないのは次に訪れた横手（現横手市）だ。人口1万人を超える横手は、バードが秋田入りして初めて見る大きな町。にもかかわらず、「惨めで陰気」と記す。3日後に訪れる久保田（現秋田市）を、「魅力的」と評したのとは正反対だ。



「訪れた所を『印象の良い町』あるいは『印象の悪い町』として書き、ストーリーに起伏をつけるのがバードの手法」と話すのはバード研究家の高畑美代子さん（青森市）。天候や本人の体調が影響することもあるが、「バードの観察眼は鋭く、過去の出来事も感じ取って印象に反映させている」と指摘する。

横手で過去に何があったのか。「続横手郷土史」などによると、バードが訪れる約1カ月前の6月14日、約170戸を全焼する大火があった。燃えたのは羽州街道周辺の鍛冶町や前郷村。湯沢から街道を北上してきたバードは、大火の痕跡を感じ取ったのかもしれない。

もう一つ、バードの印象に影響した可能性があるのが、10年前の戊辰戦争だ。戊辰の激戦地はバードの印象が悪いという研究者らの指摘は以前からあり、秋田の前に訪れた山形県でも、城下が焼き払われた新庄（現新庄市）について「うら寂れたところ」と記している。



150年前の1868年、新政府側についた秋田藩は各方面から奥羽越列藩同盟軍に攻め込まれた。県南では湯沢などが攻略され、横手も旧暦8月11日に攻撃を受ける。横手市史によると、横手城は炎上し陥落。城下でも火の手が上がった。

10年後にバードが泊まったのは城下町中心部（現大町周辺）だったと考えられている。市史の執筆に携わった岩手大教養教育センターの脇野博教授（近代史）は「横手は火事に加え、略奪の被害も大きかったはず。元の状態に戻すのは容易ではなかったのでは」とする。戊辰戦争では久保田城下などを除き、多くの地域が戦禍に巻き込まれた。

戦火や火災からの復興にあえていた県南。だが町の周辺には本来の平穏な風景が残っていた。バードはそれを感じ取り、紀行にこう記している。

「路傍には祠（ほこら）が無数にあり、観音が祀（まつ）られ、とても気持ちのよい田舎だった」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

© 2019 Akita Sakigake Shimpō